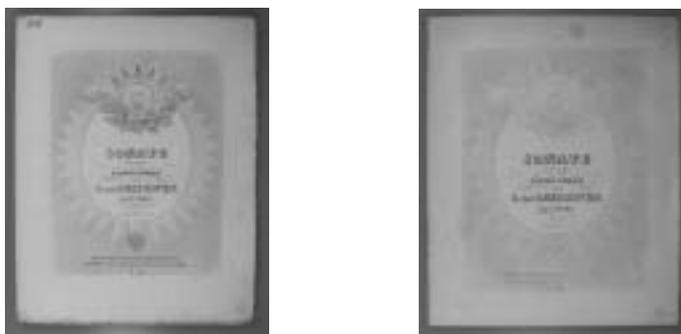


ハースリンガーによるベートーヴェン・ピアノソナタ全集の意義

国立音楽大学附属図書館所蔵の2つの初版を用いて

藤本一子



Op. 31 - 2 : ハースリンガーによる茶色表紙版 (左) と赤色表紙版 (右)

1. はじめに：今回の資料調査の目的

国立音楽大学附属図書館は、ベートーヴェンの「初期楽譜」を多数所蔵している。それらはすでに報告がなされたように、「初版譜」「後続版」「編曲楽譜」、その「後続版」や「異刷り」など、きわめて多岐にわたっている【参考文献8】。「初版譜」はともかくとして、こうした後刷り楽譜の多くは資料目録では、タイトルなど主要な情報記載に限られており、そこから楽譜内容の詳細を知ることは困難であろう。現実に多数の「初期楽譜」を調査する必要はこの点にある。これら初期楽譜の調査、あるいは現行版との比較を通して、ベートーヴェンの作品受容のありかたや、当時の印刷楽譜の状況を知ることができるだろう。

今回は大学附属図書館所蔵の「初期楽譜」から、トビアース・ハースリンガーによる「ベートーヴェンのピアノソナタ全集」を調査し、その意義をたずねることとする。

この全集楽譜を対象とした理由はおもに次の点にある。

- 1) ベートーヴェンのピアノソナタの受容において重要であるとされているにもかかわらず、その実際についてこれまで詳細な報告がなされていない。
- 2) 国立音楽大学附属図書館所蔵の初期楽譜 [以下、場合に応じてKコレクションと略称する] において、複数の楽譜資料が、ほぼ系統的に整っており、調査結果の有効性が見込まれる。

以上の2つの理由による。

2. ベートーヴェン存命中の全集企画

ハースリンガー版「ベートーヴェンのピアノソナタ全集」の刊行年代については後述するが、いずれにせよ、これはベートーヴェン没後に刊行された。それでは生前にはピアノソナタ全集は刊行されなかったのだろうか。これについて簡単にたどっておこう。

ベートーヴェンは生前から、彼自身の作品全集を出版したいという意欲を強く持っていた。すでにモーツァルトとハイドンの作品は、不完全ではあれ、全集出版が始められていたから、この二人を模範としてきたベートーヴェンとしては、“自分も”という意識はかなり強かったに違いない。また出版社側も、ベートーヴェンの名声が高まるにつれ、アプローチを重ねていたと想像される。

この点に関して確認される最初の記述は、1803年6月2日にブライトコプフ&ヘルテル社がベートーヴェンに宛た手紙にみられる。「価値ある一人の作曲家の作品をひとつの出版社から同じ版で出版できれば、愛好家にとって嬉しいことです」【参考文献7：書簡全集141】。

じつはモーツァルトとハイドンの全集出版をすすめていたのは、このブライトコプフ&ヘルテル社であった。しかし一方、同年9月に、マインツのツレーナーがベートーヴェンの許可なしに、ピアノとヴァイオリン作品に関する全集出版の広告を出した。ブライトコプフ&ヘルテル社はこのことをベートーヴェンに伝え【書簡全集156】、ベートーヴェンはこれに対して複数の新聞紙上で、ツレーナーへの警告文を掲載したのだった【書簡全集163の注5】。ツレーナー版については、1815年までに少なくとも13冊が刊行されたことが判明している。

こうしたことに刺激をうけたのか、ベートーヴェン側も積極的に出版社に働きかけるようになる。

1810年に、まずブライトコプフ&ヘルテル社と交渉(1810年8月21日)【書簡全集465】。しかし「ベートーヴェン作品が四散」しており、同社で「全ての著作権をクリアすることはむづかしい」との理由から、この全集企画は暗礁にのりあげる。以後、ベートーヴェンは1816年にライプツィヒのホーフマイスター&キューネル社と交渉し、次いでウィーンのシュタイナー社と交渉を始める。ベートーヴェンはシュタイナー社に対して、一万フロリンという高額の報酬を要求し、それと引きかえに、以後作曲される全作品の独占出版契約をもちかけた。しかしこの交渉も実を結ばない。まずベートーヴェンは独占出版を実行しなかったし、ほかの出版社アルタリア、モロ、カッピがシュタイナーの全集に吸収されることを拒否したからである。ただし計画そのものは生き続ける。

このほか、ボンのジムロックがツレーナーと同様の企画を試みたり、あるいはエックシュタインなる人物が全集刊行の件でアプローチしたことも筆談帳から知られている【参考文献1】。

1820年を過ぎるころ、全集計画は具体性をおびてくる。1822年6月5日付のカール・ペータース宛の手紙はベートーヴェンの熱意を証明し【書簡全集1468】、1823年頃には再びシュタイナーの名前があがってくる。アルタリア社も浮上し、さらには1824年にはシュトライヒャー(ウィーン) 1825-26年にはシュレジンガー(ベルリン)とショット(マインツ)の名前が出てくる。このほかに当時、ベートーヴェンの全集を企画した出版社としては、シュレジンガー(パリ) プロープスト(ライプツィヒ) ドウンスト(フランクフルト) アンドレ(オッフエンバック) キューネル(ライプツィヒ) ファラン(パリ) ホレ(ヴォルフエンビュッテル)などの出版社があげられる(注1)

これらの全集はまずピアノ作品を対象としていたが、そのほか、すでに歌曲全集の企画があったことは、歌曲作曲家ベートーヴェンの位置を探る意味において注目されてよいだろう。

3. トビアス・ハースリンガーによるベートーヴェンピアノソナタの全集計画

こうした出版社企画の中で、トビアス・ハースリンガーTobias Haslinger(1787-1842)がぬきんでることとなった(注2)。

ハースリンガーは最初はシュタイナー出版社の従業員であったが、1815年に共同経営者となり、1826年(または1825年)以降、同社の単独経営者となる。おそらく経営手腕に優れていたであろう、サロンで音楽会を催し、音楽会チケットの販売を行うなど、音楽業界に目ざましい足跡を残している。ベートーヴェンの葬儀で、松明を掲げて棺に随伴した40名の一人でもあった。1829年に宮廷から称号をうけ、ウィーンの名誉市民、またスウェーデン王立アカデミーの名誉会員の称号も持つ。1832年にはモロ社を買収。彼の没後、出版物は1843までトビアスの名前で、1844-48年は夫人と息子の名前で、1849年以降はカール・ハースリンガーの名前で出される。カールの没後(1868年)も未亡人が経営するが、1875年シュレジンガー-リーナウに売却された。

シュタイナー=ハースリンガー社は、1818-1820年頃に「ベートーヴェンの手書き全集楽譜」を企画した。これはロンドンで売却予定だったが、ルドルフ大公が1823年9月に購入した。ここにはベートーヴェンの作品62冊が収められ、おそらくハースリンガーはこれをもとに1826年に(この年単独経営者となる)印刷楽譜の予約出版を企画する。しかしこの計画は、またもや著作権問題に阻まれる。この当時、著作権の問題はかなり深刻にうけとめられるようになっていたようだ。このことは1829年春に著作権保護のための「フェラインス・アルヒーフ」が結成されたことから、容易に想像される。

ハースリンガーは、ジムロック、アルターリア、ブライトコプフ&ヘルテル、シュレジンガー、ショットと著作権協定を結ぶことができなかった。とくにアルターリアとブライトコプフ&ヘルテルは全集企画のライバルだったこともあり、これらの社の作品については最後まで著作権をクリアすることができなかった。

このときのハースリンガー全集企画については、1828年12月の第2出版カタログ(1828年12月から、かなり詳細な情報をえることが出来る(参考文献1ほかに再録)。これによれば、全部で「21のシリーズ」が計画され、「第1シリーズ」としてピアノソナタから刊行が開始されたようだ。そこで明示されているように、ハースリンガーはこの全集楽譜にきわめて意欲を示しており、「テンポ指示、訂正、出版社のニュアンスほか、全般的に必要なと思われる校訂」を行い、さらにそのための協力者として、「カール・チェルニー、シュパンツィク、カール・ホルツ」が加わると述べている。またアルターリアとモロ社の協力がえられていないことも明記している。ただし1832年モロ社については買収に成功することで問題は解決する。

この全集はルードルフ大公への献辞とともに出発した。しかし最集的には21シリーズが刊行されることはなく、不完全なかたちで9シリーズが実現したのみだった[以下のリスト参照]

トビ-アス・ハースリンガーによって実現したとみられるベートーヴェン全集

()	は国立音楽大学附属図書館所蔵の冊数	
:	ピアノソナタ 30 曲	(96 冊)
:	独奏ピアノ曲小品	(7 冊)
:	ピアノとヴァイオリン二重奏曲 8 曲	(3 冊)
:	ピアノとチェロ二重奏曲(パート譜) Nr.1-7	
:	ピアノ3重奏曲 5 曲	(6 冊)
:	ピアノを含む四重奏曲と五重奏曲	(1 冊)

：弦楽三重奏曲	(11冊)
：弦楽四重奏曲 Op.95 まで	(21冊)
：交響曲 (Op.55 の弦のパートのみ知られている)	
Sonderreihe : ピアノ協奏曲 5 曲とヴァイオリン協奏曲のピアノ版	(7冊)

4 . T.ハースリンガーのピアノソナタ全集

1) 計画

出版カタログから、ハースリンガーは 1828 年 12 月末の時点で、「第 1 シリーズ」(ピアノソナタ)から 8 作品を出版したことがわかる。この最初の 8 曲とは、選帝侯ソナタ Wo047 の 3 曲、Op.10 の 3 曲、Op.26、Op.28 である。このあと、Op.2 の 3 曲と Op.106 を除く全てのソナタが引き続いて構想された。

繰り返すことになるが、最も大きい問題は著作権の協定であった。ハースリンガーは最終的にアルタリア社については放棄せざるをえない。またブライトコプフ & ヘルテル社については、おそらく著作権の許諾をえないまま出版したと想像される。ハースリンガーがいかに多くの努力を払って版を集めようとしたかを物語るのが、Op.22 であろう。このソナタは、ヨーゼフ・チェルニーから初版が出されたが、ハースリンガーはホーフマイスターがキューネルをへてペーターに渡したものを使用したようだ。

2) 刊行年代

以上に述べたように、ハースリンガーのピアノソナタ全集は 30 曲を収載する。これらは一度に彫版されたのではなく、おそらく 3 段階にわたって、すすめられたことが推測される。それは以下のハースリンガー資料から判断される。

第 1 段階 : 1828 年末の出版カタログへの記載の有無/および楽譜下段の著作権者名に、1830 年に授与された宮廷音楽出版社 KK の称号がつけられているかどうか。

第 2 段階 : 1833 年の第 3 出版カタログへの記載。

第 3 段階 : 第 3 出版カタログに記載がなく 1834 年以降の出版と考えられるもの。これは Op.14 , Op.22、Op.78、Op.79、Op.81a、Op.109、Op.110、Op.111 であろうと考えられる。

しかしホーフマイスターの「音楽ハンドブック」(第 2 追補 : 1829 - 1833 を含む)には、すでに 30 曲があげられており、このようにみえてくると、明確な出版年代を確定することはむづかしい。いずれにせよ、この時期に何段階かで出版されたことは確かであろう。

3) 刷りの種類 : 3 または 4 種類の刷り ?

ハースリンガーの全集は、まず白黒表紙のフランス語タイトルで出版されたことがわかっていいる。これは一般に新版 (Nouvelle) と称されている。最初の 8 曲はこのかたちであった。それ以後も同じ表紙で何曲かが出版されたが、詳細は不明である。例えば、ドイツ【参考文献 1】が確認していない作品 27 の 2 曲が、K コレクションには所蔵されており、おそらくドイツ後の調査では数多くの版が確認されているだろう。新しい報告が待たれるところである。

さて、このあと色表紙の全集が出版される。これが「茶色表紙版 Braune Auflage」と「赤色表紙版 Rote Auflage」の 2 つの刷りである。これらは表紙デザインはまったく同じ。色だけが変わられ、約 73 冊の規模で、1833 年から 1835 年の間に出されたようだ【参考文献 2】。このあと、第 2 の大規模な全集計画はあられない。かなり多くの費用と労力と時間をかけて出版された 2 つの刷りの全集楽譜とは。いったいどのようなものなのか。

これらについては、楽譜の出版状況が明らかでないために、これまでノッテボームやキンスキー＝ハルムといった研究者によっても、報告がなされていない。1930年にドイチュが研究報告を行い、1979年にヴァインマンがこれを補足したのにとどめられているままである（注3）。

4) ハースリンガー全集が基にした版

ところでハースリンガー全集は、いかなる版に基づいているのだろうか。

これについては各楽譜第1ページ下部分に著作権の記載があり、版の出自を教えてくれる。そこから得た情報を【資料1】に示した。

これをみると、ハースリンガーは自社またはその系列から、可能なかぎりオリジナル楽譜の改題版を使用していることがわかるだろう。Op.31のヨーゼフ・チェルニーとジムロックの関係は直接にはないが、系列の出版社を迂回したとみられる。Op.79 - Op.81aは、オリジナルはブライトコプフ&ヘルテル社であるために、著作権がクリアできていない。おそらくこれも別社経由で、しかも無断使用したと推測される。Op.79とOp.81aの()内は、ドイチュの調査による。

これによってハースリンガー全集は、オリジナル楽譜を尊重して出発したことが明らかであろう。

5. 楽譜の比較調査

つぎに楽譜の調査報告に移ることとしよう。【資料1】を参照されたい。ここではハースリンガー全集のうち、まずKコレクションが所蔵している「茶色版」と「赤色版」の二つの刷りの初版を対象としているが、同時にそれと関連する楽譜資料との比較調査をも行った。

【資料1】に関してここで若干の注記をしておきたい。

表に記載したS番号は、Kコレクションの所蔵番号であり、すなわち同コレクションが所蔵していて直接、調査することができたことを意味する。新版 Nouvelleの()内は○は刊行されたことが確実なもので、△は刊行されただろうとされているものである。ハースリンガー版に、著作権者の記載について3種類にわけて示した。その判別は欄外に注記したおいた。これによって彫版の段階が推定されるのである。二重線から右には、19世紀のピアノソナタ全集のうち、Kコレクション所蔵のものを記した。これらの比較調査については簡単に後述したい。

楽譜の比較調査作業

1) オリジナル版とハースリンガー全集の比較（新版、2つの色表紙版：茶色と赤）

改題版とは、基本的に中身は同じで表紙をさしかえて売り出したものとされているが、ほんとうにオリジナルと楽譜内容が一致するのか。これについて、Kコレクションが所蔵する3点を詳細にオリジナル版と比較し、これによって両者が一致することをまず確認した。

つぎにハースリンガー全集のうち新版 Nouvelleと茶表紙版 Brauneを比較。

この比較作業から、両者は表紙が異なるだけで、楽譜内容は一致することが明らかになった。これを通して、新版と茶表紙版は、基本的にオリジナル版をもとにした同種の楽譜であるといえよう。このことは推定はされてはいたが、複数の楽譜の比較調査により、確実視が可能となったてよい。

以上のプロセスをふまえ、茶表紙版と初版 OA [OriginalAusgabe] を比較。

この調査において茶表紙版は初版にかなり修正を加えていることが判明した。(1)メトロノーム記号。(2)OAに誤って欠落したとみなされる臨時記号の修正、スラーの修正。

クサピスタカートを丸スタカートに変更など。(3)ダイナミック記号の追加もわずかだがみられる。

しかし修正・変更の多くは音楽的に本質的ではない。さらにこれは初期の作品群に顕著であり、Op.53以降にはほとんどみられなくなるという傾向があることも明らかとなった。おそらく初期の作品群のオリジナル楽譜そのものに不備が多いことに起因していると思われる。1828年末のカタログ上でハースリンガーは、「テンポ表示、訂正、出版社の楽譜ニュアンス」を書き入れたことを「売り」にしているが、ここでの変更がそれにあたりとみなしてよい。

つぎに茶表紙版 Braune と赤表紙版 Rote の比較。

これが最も興味あるもので、今回の調査目的といってもよい。

(1)メトロノーム表示が変更。しかもわずかの例外を除いてほとんどが遅くなる。【資料2 メトロノーム表示の変遷】(研究年報本体に掲載。ただし本ファイル上では割愛したことをお断りしておく)

(2)茶色表紙版の印刷ミスと思われるものの修正。Op.49 くらいまでの作品群に目立つ。Op.53以降は少なくなる。

(3)ダイナミック、アーティキュレーションに関する追加。これはかなり目立つ。オリジナル版にあって茶表紙版に欠けていたものを補充するという意味においてではなく、まったく独自に Rote 版の段階で、大幅に音楽的な表現意図をもって追加が行われているのである。とくに Op.53、Op.57、Op.81a.に顕著とみられる。その内容は、スラー、p、f、s f、cresc.、クレシェンド・ガーベル、ディクレッシェンド・ガーベル、ドルチェ、エスプレッシオーヴォの表示などで、とくに多いのはアクセント記号の追加。音楽表現にインパクトを与えることとなっている。これらが中期作品に著しいということを見ると、あるいは作品の性格が校訂者チェルニーに刺激を与えたとも考えられる。(参考例：Op.28の茶表紙版と赤表紙版の比較。《熱情》Op.57第1楽章冒頭の楽譜比較、および《告別》Op.81a第1楽章冒頭の楽譜比較。○印は筆者によるもので、茶表紙版からの音楽表現上の追加が著しいことが、これによって明らかであろう。)

おそらく短期間で表紙を新しくしたと思われる赤表紙版において、このような音楽テキスト本体に関する追加がなされたことには、強く関心をそそられる。「演奏法」を楽譜に記入してゆく傾向が、しだいに一般的となり、それがここにあらわれたともみられる。茶表紙版と赤表紙版の比較作業を通じて、従来の文献においては、報告されたことのない楽譜をあらたに見出すことができた。

それは茶の表紙をもちながら、中身が赤と同様に改訂された楽譜である。

すなわちKコレクションは10曲に関して複数の茶表紙版を所蔵しているが、それらの片方が、楽譜の中身だけでなく赤表紙と同じく改訂されていることが判明した。その茶色の表紙は、偶然であろうか、ほかの茶表紙よりも色が薄く、文字の印刷も薄れていることに気付かされる。あるいはいわゆる茶表紙版と赤表紙版のあいだに、「茶表紙=改訂版」という中間段階があったのかも知れない。複数の楽譜を所蔵することから偶然に見出した貴重な情報であろう。

2) カール・ハースリンガー版(1849-1865)

トビーアスなきあとのハースリンガー社は、まず、赤表紙版で、しかし社名をカール・ハースリンガーと変更して1冊づつ出版する。このあと全体を2冊本に編集して35曲のソナタ

集とした。ここでは基本的に赤表紙の中身が引き継がれている。メトロノーム表示は誤植と思われる箇所を除いて赤表紙版そのまま。字体と音符の姿は変更されるが、内容は赤表紙版そのものといってよいであろう。ここでも Op.2 と Op.7 の版權はクリアされていないが、Op.106 については収録可能となっている。不思議なことに、第1巻の最後は15番 (Op.31-1) であるのに、第2巻の最初は19番 (Op.49-1) から始まる。いったいOp.31-2と3はどうなったのだろうか。また、なぜ18番ではなく19番から始まるのか。謎のままである。

6. 19世紀後半のピアノソナタ全集

さて、カールの全集が刊行された1865年頃には、有名な二つの演奏家が校訂したピアノソナタ全集が出版されていた。フランツ・リストとイグナツ・モシェレスによるものである。いずれもベートーヴェンの直接の弟子である。これらの版についても比較調査を行ったので要点を報告しておこう。リスト版 (1857年以降) は基本的にオリジナル楽譜を踏襲しており、比較的追加が少ないのが特徴。反対にモシェレス版 (1858年) は、いかにも演奏家による実用楽譜といった感が強く、ペダル、運指をはじめ、ダイナミックも豊かに加えられている。その一方で、出版社主導の全集としてブライトコプフ&ヘルテル社から全集が刊行される。同社は1848年頃から全集刊行を計画していたが、ようやく1867年に実現した。こうしたなかで、カール・ハースリンガーは1875年にシュレジンガーに売却され、50年にわたった出版活動を閉じる。

7. 楽譜比較調査から導かれたハースリンガー全集2つの初版の特色

トビアス・ハースリンガーは彼自身がベートーヴェンの親友であったし、仲間たちもまたベートーヴェンに近い人物ばかりであった。その人脈と、また、おそらく商才とによって、受容史上はじめて30曲を収録するベートーヴェン・ピアノソナタ全集を実現した功績は、特筆されてよい。

その版の特徴は以下のようにまとめることができる。

オリジナル版を尊重し、オリジナル版を基にまずは版の整備という方向から出発している。短期間のうちに茶表紙版と赤表紙版という2つの刷り、厳密には新版、茶表紙版、茶表紙=改訂版、赤表紙版の4つの刷りを出版した。この間、意欲的に改訂を重ねたことが注目される。

ベートーヴェンの弟子でもあったカール・チェルニーという演奏家を、一貫した校訂者とし、音楽表現上の表示を意図的に加えた。

校訂者による改訂は、まずはオリジナル版の整備から出発しながら (第1刷) 独自に音楽表現を詳細に指示する方向 (第2刷) へと果敢にすすめた。

この全集出版はハースリンガー自身の要請から生まれたと思われるが、これを可能ならしめた財政上のゆとりなくしては実現はならなかったはずである。この点でトビアス・ハースリンガーの、ウィーン音楽業界でのめざましい活動が想像される。

ハースリンガー全集は、一貫した高いレベルの楽譜作成によって、以後のベートーヴェンのピアノソナタの楽譜について、そして何よりも以後の全集の流れを喚起したものとして、あらためてその意義が強調されるべきであろう。

ただし世紀後半においてしだいに主流になってくるのは、おそらくブライトコプフ&ヘルテル社の版であり、ここから旧ベートーヴェン全集もつくられるのである。なぜハースリンガー

ではなくブライトコプフ&ヘルテルなのか。このことの経緯を探り、20世紀の全集楽譜への道を見きわめる必要があるだろう。そこにおいて、はじめてハースリンガー全集の意義が再確認されるに違いない。

注1：これらは筆談帳などの一次資料からドイチュが推測した情報による【参考文献 1】。

注2：トビヤス・ハースリンガーはベートーヴェンとはきわめて親しい交友関係を結んでいた。ベートーヴェンはユーモラスに彼の名前をもじってカノン遊びをしており、信頼度も高かったようだ。

注3：筆者はこのたびの楽譜調査に際して、ボンのベートーヴェン・アルヒーフに、先行研究の有無について照会したが、ヴァインマン以後は報告がないこと、詳細な調査が行われれば、きわめて重要な貢献となるだろう、という返信をえていることを、付け加えておきたい。

使用楽譜

1. 国立音楽大学附属図書館所蔵ベートーヴェン初期楽譜(使用楽譜および参考楽譜一覧表にS番号で記載)
2. Ludwig van Beethoven. The 32 Piano Sonatas. In reprints of the first and early editions, principally from the Anthony van Hoboken Collection of the Austrian National Library. England 1989

使用楽譜の刊行年について

- ・初版(オリジナル楽譜)はキンスキー=ハルム編「ベートーヴェン作品総目録」(参考文献6)に基づく。
- ・初版の改題版 Titel Auflag はキンスキー=ハルム編「ベートーヴェン作品総目録」(参考文献6)に基づく。
- ・T・ハースリンガーの「ピアノソナタ全集」は、およそ1829年から1842年までに刊行と推定される。刊行年は楽譜テキストページ下に付された版權表記に依じて、おそらく以下の3段階にわけることができるだろう：

“Eigenthum und Verlag von Tobias Haslinger in Wien 出版と版權はウィーンのトビヤス・ハースリンガー”：1828年から1830年9月。

“Eigenthum u. Verlag der k.k.Hof-u.priv.Kunst-u.Musikalienhandlung des Tobias Haslinger in Wien”(版權と出版はウィーンの皇・王室宮廷の、特許をえた美術音楽商であるトビヤス・ハースリンガー)；1830年から1833年12月。

版權表記に“u.priv.”(特許を与えられた)の字句のないもの。すなわち：“版權と出版はウィーンの皇・王室宮廷の美術音楽商であるトビヤス・ハースリンガー”とのみ記載；1834年以降。

これについてはハースリンガー社の第2カタログ(1828年末)、第3カタログ(1830年)ホフマイスターの音楽ハンドブック(1829-1833年の出版楽譜を掲載)などへの掲載の有無により、おおよその年代を推定することが可能である。

* 楽譜調査および資料作成は坪崎朋美さんの補助をえたことを付記しておきたい。

おもな参考文献

1. Otto Erich Deutsch, Beethovens Gesammelte Werke. Des Meisters Plan und Haslingers Ausgabe. In; Zeitschrift für Musikwissenschaft 1930-31, H.2. S.60-70

2. Alexander Weinmann, Tobias Haslingers "GESAMTAUSGABE DER WERKE BEETHOVENS". In; Beitrage zur Beethoven-Bibliographie. Henle, Munchen 1979. S. 269-279.
3. Alexander Weinmann, Vollstandiges Verlagsverzeichnis Senefelder, Steiner, Haslinger. Bd.2 Tobias Haslinger (Wien 1826-1843) Katzbichler, Munchen-Salzburg 1980
4. Alexander Weinmann, Vollstandiges Verlagsverzeichnis Senefelder, Steiner, Haslinger. Bd.3. Tobias Haslingers Witwe und Sohn und Carl Haslinger qdm. Tobias. (Wien 1843-1875). Katzbichler, Munchen-Salzburg 1983
5. Katalog der Sammlung Anthony van Hoboken in der Musiksammlung der Osterreichischen Nationalbibliothek. Band 2.: Ludwig van Beethoven Werke mit Opuszahl. Bearbeitet von Karin Breitner und Thomas Leiznitz. Tutzing 1983. S.87
6. Thematisch-bibliographisches Verzeichnis aller vollendeten Werke Ludwig van Beethovens von Georg Kinsky. Nach dessen Tod vollendet und herausgegeben von Hans Halm. Henle, Munchen 1955.
7. Beethoven Briefe. Bd.1-7. Herausg. von S. Brandenburg. Henle, Munchen 1996-98.
8. 藤本一子、国立音楽大学附属図書館所蔵のベートーヴェン初期楽譜コレクションの概要と研究意義について ; 国立音楽大学研究所年報、第13集(1999年度) p.23 - 38